

中国古代儒家文献に見る反戦思想 (2)

『儀礼』『大戴礼記』『周礼』『詩経』

Antiwar Thoughts in the Confucian classics (2)
: Yi Li (『儀礼』), Da dai Li Ji (『大戴礼記』), Zhou Li (『周礼』) and Shi Jing (『詩経』)

濱 川 栄

Sakae HAMAKAWA

(平成二十八年十一月十八日受理)

抄録

前稿に引き続き、本稿では『儀礼』『大戴礼記』『周礼』『詩経』に見える反戦的・厭戦的言辞を確認した。その結果、前三書にはそうした言辞は確認できなかった。これらは漢朝の顕彰を役割とされ、儒学(儒教)が漢朝の御用思想となる過程で編纂・経典化されたものであるため、漢朝の存在意義を揺るがしかねない厭戦的・反戦的文言が見られないのは当然のことである。それに対し、周代以来の詩を集めた『詩経』では、全三〇五首中一九首の詩に厭戦的・反戦的言辞を確認できた。特に夫が従軍中であることを嘆く夫婦の詠んだ詩が多い点に注目される。儒家は、こうした詩を多数『詩経』に収録し後世に残すことで、為政者を軍事に慎重な政治に向かわせようとしたものと推測される。しかし、今回も『塩鉄論』の「絶対平和主義」に匹敵するような概念や言辞は見いだせなかった。

キーワード：儀礼，大戴礼記，周礼，詩経，厭戦的言辞

はじめに

前稿¹に引き続き、中国古代の儒家文献に見える反戦思や反戦的言辞を抽出・検討する。本稿では『儀礼』『大戴礼記』『周礼』『詩経』を取りあげることとする。

しかし、その前にこの一連の研究の目的と前稿までの成果についてざっと確認しておきたい。そもそも発端は、前漢中期(昭帝期)の前八一年に実施された「塩鉄会議」において、塩・鉄・酒の専売制継続に反対する賢良・文学(民間の儒者たち)が、専売制実施の根拠となっていた対匈奴戦争の継続自体に反対したさい、漢側の陰謀(匈奴の単于を甘言でおびき寄せ、討ち取ろうとして失敗)で始まった不義の戦いであるがゆえにこの戦争は続ける大義がない、と主張し、異文化集団たる匈奴との平和共存は不可能として戦争と専売制の継続を訴える御史大夫(桑弘羊)らに対し、相手が匈奴であつても漢の儒家的徳政で醇化させれば共存は可能、と徹底的に反戦平和を訴え続けた口吻の執拗さにあらためて気づかされたことにある²。

このような「絶対平和主義」は、従来の歴史研究では単なる空理空論、絵空事に過ぎないとみなされてきた。人類は、そうした牧歌的な絵空事に真剣に向き合うにはあまりにも多くの戦争を経験し過ぎてきた。歴史と戦争は密接不可分、いや「戦争こそ歴史そのもの」という観念こそ歴史研究者から

市井の庶民に至るまで浸透した常識である、とすら言えるかもしれない。

しかし、そうであるからこそなおさら、桓寛『塩鉄論』³で見ることが出来る賢良・文学の執拗な「絶対平和主義」には、違和感と同時にある種の感銘も覚えるのである。また、福井重雅の言うとおり、彼らの「絶対平和主義」が「一般の人心を掌握し得た点」に儒家と法家との思想闘争における儒家の勝利と、その後急速に儒学(儒教)が漢王朝の正統思想の座を占め、法家等の他の思想を圧倒し駆逐していった事実の要因の一端を認めるならば⁴、それはもはや単なる絵空事ではなく、その後二〇〇〇年にわたって連綿と続いた儒教国家体制を確立させたという点で、極めて現実的な影響を發揮したことになる。そしてそれは、少なくとも前一世紀前半の中国の人々が、戦争を強く忌避する感情に包まれていたことをも示しているのである。

一方、『塩鉄論』に見える賢良・文学の主張がそれ以前の儒家思想の伝統を継承していることは疑いない。なぜなら、儒学は堯・舜・禹や周の文王・武王・周公旦など上古の伝説的帝王や周代初期(前一一世紀末—前一〇世紀初め頃)の諸王の政治を理想とし、常に上古からの古典籍に依拠して自説の正当性を主張する、極めて歴史主義的な思想だからである。そうである以上、中国社会における反戦思想は、塩鉄会議の場で突然表出したものではなく、もっと古くから胚胎して

いたものと考えられる。いったい、『塩鉄論』の賢良・文学の「絶対平和主義」に帰結する儒家の反戦思想は、いつごろから、どのような形で芽吹き始めたのであろうか。

しかし、これまでの歴史研究や思想史研究が「人類史は戦争の歴史」という通念を当然の前提とするものであり続けてきたため、右の疑問を解明するような先行研究は管見の限り一つとしてない。そこで筆者は、『塩鉄論』に先行する少なからざる儒家文献を逐一精査し、その中から反戦思想的言辭や行動を抽出し、『塩鉄論』の「絶対平和主義」が生み出されてきた歴史的経緯を明らかにする作業を前稿から始めたのである。

前稿では『易経』『書経』『礼記』『論語』について見た。その結果、『書経』商書・湯誓、周書・大誥に戦争そのものを忌避する庶民の声が見え、『中庸』第二段第二節や『論語』泰伯篇に孔子の高弟顔回の「無抵抗主義」（危害を加えられなくても報復をしない）が見えるなど、断片的ではあるがいくつかの反戦思想的言辭を抽出することができた。しかしながら、それらの断片的・微温的な反戦・平和思想と『塩鉄論』の賢良・文学の執拗かつ激烈な主張との間には、なおかなりの懸隔がある。自国の非を認め、譲歩によって敵と和平を結ぶことを主張する思想、あらゆる戦争を全面否定する「絶対平和主義」に、賢良・文学はどのようにして到達したのであろうか。本稿でも引き続きそれを探っていく。

一、『儀礼』について

『儀礼』は周公または孔子の撰ともされ、『漢書』卷三〇芸文志は漢初の魯の高堂生の撰とするが、実際は戦国時代末に成立したと思われる。高堂生が伝えた今文（漢代に通用していた字体）のテキスト一七卷とは別に、孔子の旧宅から発見されたという古文（上古の字体）のテキスト五六卷があり、後漢末の大儒・鄭玄が校合して今日の『儀礼』一七卷の原型ができたと思われる。上層階級の日常生活・冠婚葬祭や宗教的行事における作法、政治的・社会的制度の詳細を記録した典籍で、俗に三礼とも言われる『儀礼』『周礼』『礼記』の中で最も伝来が古く、かつ確かなものとされる。今日、儒学の基本的經典は一般に『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の五経とされる場合が多いが、儒学が王朝の御用思想としての地位を確立する漢代において実際に最も通行していた「礼」の典籍は『儀礼』であったと思われる。したがって、『儀礼』から反戦思想的言辭が抽出できれば、漢代においてそうした思潮が日常的に存在した根拠となるはずである。

しかし、『儀礼』にはそのような言辭はただの一つも見出せなかった。全編、ひたすら事細かな儀式作法の羅列であり、今日的な表現をすれば「詳細な儀式マニュアル」そのものである。

しかしそれは、ある意味では当然と言える。「礼」とはそ

もそも儒学(儒教)の価値観、すなわち「仁」「孝」等の文字で表される家族道徳・君臣道徳、長幼の序に基づく社会秩序を、儀式典礼を通じて「可視化」するための手段である。端的に言えば、人間の欲望や不満の噴出を制御することがすなわち秩序の維持になるのであり、それを実現するために人々に煩瑣な作法を学習させ順守させることが「礼」の制度的役割だったのである。

「礼」の効能を表す象徴的なエピソードがある。前漢初代皇帝の高祖劉邦は、漢王朝成立(前二〇二年)直後、恩賞や待遇に不満を持ち、日々飲酒し喧嘩に明け暮れ、謀反さえたくらむ武将たちの扱いに苦慮していた。その時、儒者の叔孫通が漢の礼制を定めるべきと進言、本来形式ばった儒学を嫌っていた高祖であったが、叔孫通に「俺が覚えられる程度にしろ」と注文をつけながらその作業をまかせた。すると翌年、新首都長安に完成した宮殿で新年を祝う式典が挙行されたさい、かつて乱暴狼藉を働いていた武将たちが威儀を正して整然たる振る舞いを見せた。高祖は思わず、「自分は今日こそ皇帝の貴さを知った」と感嘆したという。戯画的なエピソードではあるが、叔孫通が定めた漢の礼制が今日に伝わる『儀礼』の内容とも共通しているとすれば、『儀礼』に見える作法の驚くほどの煩雑さから推察して、荒くれ者の武将たちの矯正にとどまらず、その礼制が一般庶民にまで普及浸透した際には確かに社会の安定化に役立ったであろうということ

想像させる。

しかしそれは、馬上で天下を取り漢を興した高祖の偉大さを顕彰し、誇示するものだったろうから、そこに反戦的要素などは微塵もなかったはずである。前稿で見た『礼記』も同様であったが、戦乱を勝ち抜いて生まれた体制の存続に寄与することこそ「礼」に期待された役割であった以上、そもそも反戦的言辭が含まれるはずはないのである。

二、『大戴礼記』について

『大戴礼記』は、前稿で見た『礼記』の姉妹編とも言える典籍である。前漢後期の礼学者であった戴徳・戴聖の兄弟(生没年不詳)が、漢初に孔子の旧宅から発見された書籍や孔子の弟子たちが記した書籍などとして朝廷に献上された大量の儒家文献のうち、「礼」に関わる二一四篇を校定・編集したものが『大戴礼記』および『礼記』であるとされる。『大戴礼記』は兄の戴徳が定めた八五篇から成り、『礼記』は弟の戴聖がそれをさらに削って四六篇にしたものだという。のち、後漢末の馬融が戴聖の四六篇に月令・明堂位・楽記の計三篇を加え全四九篇とし、さらに馬融の弟子の鄭玄が詳細な注をつけたために以後は戴聖本が盛行して『礼記』と呼ばれるようになり、五経の一つとして長く読み継がれたが、戴徳本『大戴礼記』は徐々に衰退してしまったという。そのため、現

在はもとの八五篇のうち第三九篇から第八一篇が伝わるのみで、そのうちの第四三篇―第四五篇および第六一篇が欠け、第七四篇が分かれて二篇となっており、全体で四〇篇が残存していることになる。一方、そもそもが後世の偽書であるという疑いも根強い。しかし、全くの捏造ではなく、ある程度は漢代以前の礼の情報を含むと見るのが穏当であろう。

それでは、冒頭の第三九篇「王言」から見てみよう。孔子に弟子の曾子(曾参)が「明王の道」(理想的な王道政治)を尋ねたところ、孔子は特に「信」の大切さを説き、

其の信に于けるや、四時春秋冬夏の如し。其の博く万民を有つや、飢えて食らうが如く、渴して飲むが如し。下土の人之を信ず。暑熱凍寒の如く、遠くして邇きが若し。

道の邇きに非ざるなり。

とする。万民にとって王が保つ「信」とは四季や寒暑のように、腹が減ったら食べ、喉が乾いたら飲むのと同じように身近なものである、ということである。そして、

其の明德を及ぼすなり。是を以て兵革動かずして威あり。用利施さずして親しむ。此を之れ明王の守りと謂うなり。

千里の外に折衝すとは、此の謂いなり。

と続く。信を保つとは、すなわち明德を及ぼすことであり、それができれば軍隊を動かさなくとも威厳を示すことができ、物資や報償に頼らなくとも人々を親しませることができ、これこそが明王による守備であり、千里の外にある敵を

も手なずけ、その攻撃を未然に防ぐ、というのである。いかにも儒家的な王道政治の表明であり、『塩鉄論』の主張にも通じるものがあるが、匈奴のような難敵を具体的に想定した議論ではなく、その分緊迫感のない抽象論になっている点は大きな違いと言える。

同じく「王言」には、明王の「征」(「正しく行く」の意だが、征伐の意も含む)について、

明王の征するや、猶お時雨のごときなり。至れば則ち民説ぶ、と。是の故に、施を行うこと彌博く、親を得ること彌衆し。此を之れ枉席の上に師を還らすと謂う、と。

ともある。明王の征は慈雨のごとく、征伐される側の民にさえ喜ばれるのであり、その恵みはあまねく広がり、親愛の情も広がる、このような状態を「敷物の上で軍隊を帰還させる」ごとき平安な治世という、とする。要するに君主が徳治政治に努めれば、軍隊はあっても使う必要がなくなるというのである。

しかしもちろん現実の政治はそううまくはいかない。いったん戦争となったら、兵士はどうするべきか。第五二篇「曾子大孝」では、『孝経』の撰者とされる曾子でさえ、戦陳に勇無きは、孝に非ざるなり。

と明言している。戦場で勇敢に戦わない者は、孝とは言えない、というのである。ここには反戦的思想は微塵も見られない。

それは(ここで見る限り)孔子においても同じであった。第七五篇「用兵」には、魯の哀公と孔子の戦争についての問答が見えるが、その冒頭に、

(哀)公曰く、兵を用うる者は其れ不祥に由るか、と。(孔)子曰く、胡為れぞ其れ不祥なるや。聖人の兵を用うるや、以て残を禁じ暴を天下に止むるなり。後世貪者の兵を用うるに及んでや、以て百姓を刈り、国家を危うくするなり、と。

とあり、「聖人」が残虐や暴虐を行う者を征伐する場合と限定しながらも、孔子が一定程度戦争を肯定しており、聖人は程遠い我欲にかられた後世の者が戦争を行うようになってから、民衆が過剰に殺され国家が危うくされるようになったのだ、という認識を示していることがうかがえる。戦争も上古の聖人たちが行えば正義となり、後世の凡人が行えば悪になるのである。儒学(儒教)の尚古主義を端的に示す一文と言える。と同時に、前稿で確認した『論語』に見える孔子の反戦的姿勢よりかなり後退した印象を与える。

以上のように、現存の『大戴礼記』には『塩鉄論』のような反戦思想は見出すことはできず、ましてや絶対平和主義的な文言は全く見ることができないことが明らかとなった。

三、『周礼』について

俗に三礼と称される『儀礼』『礼記』『周礼』のうち、その成立過程や内容に最も疑念を持たれてきたのが『周礼』である。本来は「周官」と呼ばれ、周公旦が周初に定めた官制を記録した典籍とされた。前節で見た『大戴礼記』と同様、孔子の旧宅等から発見され漢の朝廷に献上された礼の資料のうち、宮中の書庫に秘蔵されていたものを前漢末に劉歆が発見し、周代の理想的官制を記した典籍として大いに顕彰したため世に現れたとされる。その直後に前漢を篡奪し新(八年―二三年)を建国した王莽を始め、南北朝時代の西魏や唐の則天武后、北宋の改革政治家王安石などが信奉した経典としても知られる。

しかしその一方でこの書には早くから劉歆の「偽作」とする声が根強い。劉歆は前漢の宗室につらなる儒学者で、大儒劉向の子という恵まれた地位にありながら、王莽との関係を深め、ついにその篡奪を助けて前漢王朝を滅亡させ、新において国師公という重職に就いたものの、のちに王莽との関係が悪化したためその暗殺を企てたが失敗し、自殺に追い込まれた。学問的な野心も大きかったようで、前述のように宮中で発見した『周礼』や『春秋左氏伝』を儒教の正統なテキストとするべく大いに運動し、それに成功したことは有名である。しかし、右のような生涯を送ったためもあってか、彼が推した『周礼』も『春秋左氏伝』も早くから「偽書」の疑いをかけられてきた。しかし、どちらも全くの偽書とは考えが

たく、漢代以前の古い情報を相当程度含んでいることは間違いないようである。

実のところ、この『周礼』にも反戦思想的な情報は見いだせない。しかし、あえて詮索すると、軍事に関わる礼制を説いた場面で軽率な武力の行使を戒める文が見いだせる。¹²

例えば、天官・宮正に、

凡そ邦の大事には王宮の官府・次舎に令して、守を去ること無くして政令を聴めしむ。

とある。国家に戦争や大喪等の大事件がある場合は、王宮中の各官府の役人に命令し、役所の部署を離れないようにして随時命令を待たせる、という意味である。一見ごく当たり前のことを言っているように見えるが、より具体的に田獵(狩獵)と軍事演習の場面における礼制を述べている夏官・大司馬には、

羣吏、誓を陳前に聴く。牲を斬り以て左右陳に徇えて曰く、命を用いざる者は之を斬らん、と。

とある。本田二郎『周礼通釈』は「命を用いざる者は之を斬らん」を「軍令を順守せず勝手に血気にはやって敵を殺す者があれば、直ちにこれ等を斬罪に処する」と訳している。¹³つまり、戦場での兵士の感情的暴発を厳にいましめているのであり、戦争という大事に直面してもあくまで上官の指示を待って適切に行動するよう求めているのである。

また、地官・大司徒には

陽礼を以て讓を教うれば則ち民、争わず。

という一文が見える。「郷射飲酒等の礼を以て民に謙讓という徳目を教えれば、其の人民は争いがなくなる」という意である。¹⁴平時における民衆の諍いも礼制により抑制できることを述べている。

また、異民族も徳治政治により手なずけることができる、という儒家思想特有の概念も当然のごとく見られる。春官・大司楽に、

六律・六同・五声・八音・六舞を以て大いに樂を合わせ、以て遠人を説ばしめ、以て動物を作す。

とあり、音楽や舞踊により「蕃国を悦服させ、百物を生々化育せしめる」と解される。¹⁵儒家的文化力で異民族をも感化できるのあり、それにより無用な戦争を避けられるということであろう。

しかし、いざ戦争となった場合には厳正な規律への絶対服従が求められた。夏官・大司馬に、

致すに及べば、大常を建てて軍衆を比し、後に至る者を誅す。

と見える。本田は「軍衆を召集するときは、太常旗を立てて馳せ参じた人数を点検して、遅刻者を誅殺する」と訳している。¹⁶また、秋官・大司寇には、大司寇の職責の一つに、

軍刑。命を上び守を糾す。

とあり、本田は「軍中の刑罰を施行することである。目的と

するとところは、命令の遵守を督励し、職守を欠く者をただしあげる」と訳している。国家の官制を記した書物である以上、上司の命令や職責を順守すべきことを説くのはもちろん、戦時となればなおさらそれを強調し、違反者は厳罰に処されることを明記しているのは当然のことではある。

そうした「威嚇」は、官制内の上下関係にとどまらない。冬官・梓人には、梓人（飲器の作成を職責とする）が作ったさまざまな飲器を使用する祭祀において王（周王）が述べべき言葉も記録されているが、その中に、

其の辞に曰く、「惟れ若寧侯、女不寧の侯、王所に属せざるが若きこと或ること母れ。故に女を射る」と。

という文言が見える。本田は「祭辞の大意は、次の通りである。汝ら、この安順にして功德ある諸侯よ。かの安順ならざる諸侯の王に朝会せざるがごときことあってはならぬ。故にここに標的を張挙して矢を以てこの輩を射る」と訳している。王に従順な諸侯に対し、決して従順でない諸侯にならないように威嚇するために、侯（射撃の「まと」。諸侯の「侯」とかけている）を射る、というのである。好戦的とまでは言えないが、諸侯をてなすけるためにはある程度の威嚇も「礼」として必要とされたことがわかる。

以上、『周礼』について検討してきた。争いごとは極力回避すべきものであるという通念や、戦場にあっても勝手な暴走は許さない、という抑制的姿勢は垣間見られたが、戦争そ

のものを絶対悪として忌避するような文言は見られなかった。何度も言うが、国家の官制を扱う典籍である以上、それは当然のことなのである。

四、『詩経』について

『詩経』は、周初から春秋時代にかけて各国で作られ、詠い継がれた詩三千余篇を孔子が厳選し三百余篇にまとめたものとされる。その真偽は定かではないが、王侯貴族から庶民に至るまでの率直・素朴な感情を表した詩が多数収載された典籍であることは疑いない。

特に日本の『万葉集』の「防人の歌」のように、兵役義務を課されて戦場にいる夫が妻や家族を思う詩、またその妻が夫を思う詩が多く、注目される。

以下、現行本の配列順に沿って注目すべき詩を取り上げ、分析していくが、『詩経』の詩の多くは極めて難解なので、訓読・現代語訳は定評ある高田真治訳注『詩経』（漢詩大系Ⅰ上・下、集英社、一九六六年・一九六八年）に基本的に依拠することとする（訓読に続けて「」内に現代語訳を示す）。

まず、国風・周南の「卷耳」の首章を見てみよう。

卷耳を採り采る 頃筐に盈たず 嗟 我 人を懐いて
彼の周行に真く

〔野辺に出て耳巻を摘み取るに なかなか小さい筥にも一

杯に盈たぬ ああ われは遙かに遠征の人を懐うて 暫し筐を路傍に置いて思いに耽る」

野原で草摘みをしながらふと出征中の夫のことを思い出し嘆息する妻の様子を描写している。これに続いて、戦地で苦勞する夫の様子を想像し案ずる章が並ぶ。作者や夫の地位・身分は不詳であり、必ずしも庶民層の詩ではない可能性もあるが、夫の身を案ずる妻の気持ち表れ、婉曲に戦争を厭う感情が吐露された一首である。実は『詩経』には、反戦的と言うよりは厭戦的なこうした詩がかなり収録されているのである。

同じく周南の「汝墳」には、もう一步踏み込んだ反戦的心情が詠われている。首章は次のように始まる。

彼の汝墳に遵って 其の條枚を伐る 未だ君子を見ざれば怒として調飢の如し

〔あの汝水の隄に沿うて 枝や幹を伐って薪とする あなたのお顔を見ぬうちは げっそりとして朝のひもじい思いをするようだ〕

高田真治は「汝水に沿う大きな隄防のほとりに行き、そのあたりに茂る樹木の幹や枝を伐り取るというのは、夫が征役のために外にあるので、留守中の妻が、木の枝や幹を伐り取って薪となし、生活の助けとするのである。薪を伐るのは、主として男の仕事であるが、今は夫がいないので、妻が夫に代わって男仕事をせねばならぬ。妻は夫の帰りを待ちわびる。

それで夫の顔を見ない中は、朝のひもじい思いをするように、心が憂えてさびしいのである。」と詳細に解説している。²⁰

この詩の第二章では一年後に夫が帰って妻が安堵する様子が詠われているが、注目したいのは続く第三章である。

魴魚頼尾 王室燬くが如し 則ち燬くが如しと雖も 父
母孔だ邇し

〔魴の魚の尾は赤くなり 朝廷の政は火の焼くようである 火の焼くように苦しいが われらを救う父母はもう近くに來ている〕

高田は「魴魚が疲れ苦しんで尾が赤くなっていることを、朝廷の政治のやり方がひどくて、夫が公役に駆り出されて苦勞することに比べたのである。然し今はこんなに苦しい時代であるが、やがてわれらを救う父母のような仁君の恵みに浴して、よい世の中になることを期待して相慰めるのである。毛伝は、王室の暴政は燬くが如くであるが、近くにある父母を棄てるわけには行かず、父母のために苦勞を忍ばねばならぬとする。」と解説している。²¹最後の二句の解釈が分かれるが、王室(周王朝)による軍役の厳しさを憂えた詩であるとすると理解は一致している。周南は殷末周初、つまり周による克殷(前一一世紀末頃)から武王・周公による輝かしい政治が実現したとされ、儒家が理想とする時代の詩を集めた篇である。そのような治世においてさえ、軍役は人々に忌み嫌われていたことになる。もちろんそうした声は、王朝への声高な批判

や反戦思想の表明というような種類のものではなく、避けられない義務として諦観しつつも、なおその辛さを慨嘆せざるを得ない偽らざる心情の吐露ではあるが、それだけにかえて胸を打つものがある。また、盛世の時代にあっても軍役の過酷さを恨む民衆の声があった、という事実をこうした詩の保存・継承によって後世に伝え、もって治世の鑑にしようとした『詩経』編纂時の儒学者たちの姿勢には、被統治者への配慮を為政者に迫り続ける意志が感じられ、徳治政治を追求した儒学(儒教)の面目躍如という感がある。例えば戦前の日本において、このような庶民の嘆きの声が出される機会が果たしてあり得たであろうか。

同様の詩はまだ続く。召南「草蟲」の首章は、

嘒嘒たる草蟲 趨趨たる阜螽 未だ君子を見ざれば 憂
心 忡忡たり 亦既に見 亦既に覩はば 我が心 則ち
降らん

〔秋も深くなって 草むらにすだく虫の音 ばったばった
とはねまわるハタハタ あなたに遭わぬうちは心配で胸
が痛む やっとお会いできて お顔を見ればほっと落ち
着くことでしょう〕

というもので、高田は「生い繁る草むらの中に、鳴きすだく虫の音、飛び交う虫の翅。雄は雌を呼び、雌は雄を慕う。秋も深くなった。冬も近づく。それなのにわが夫は出役してまだ帰らぬ。やがて秋も過ぎ、寒い冬になって、夫の勤めもさ

ぞや辛さが増すであろうと、心配が胸に盈ちて、やるせない心の憂い。無事に帰って、また会うことができたなら、どんなにか胸がすうとして落ち着くであろう。夫の姿が眼に浮かぶ思いである」と解説している。²² 続く第二章にも「未だ君子を見ざれば 憂心惓惓たり」、第三章にも「未だ君子を見ざれば 我が心傷悲す」と出征した夫に会えない悲しみが吐露されている。

次に、黄河下流域の小国・衛の詩を集めた邶風から。「擊鼓」は、文字通り鼓を撃ちながら勇ましく戦場に臨んだものの、戦況が悪化し、もはや戦死は必至となった状況下で兵士が妻への想いを詠った詩である。その第三章は次のようになって

死生契闊 子と説を成せり 子の手を執りて 子と偕に
老いんと

〔死ぬるも生きるも苦勞を共にしようよ そなたとしばしば約束の言葉を交わしたのであった そなたの手を執って そなたと共白髪までと誓ったのであった〕

高田は「出征の兵士が、家郷に残した妻を憶う情を述べたのである。子とは、ここではその妻を指す。そなたと結婚の始めにあたっては、死生を共にしようと思つて苦勞を重ねて来て、いつまでも離れまいとしばしば約束を交わした。そなたの手を執って、そなたと偕老同穴の契りを誓ったことであつた。然るに今はこんな無名の軍に参加して、いつ果てる

かもしれぬ身の上になっている。偕老同穴の誓いを果たすこともできずに、屍を山林の間にさらすかも計られぬありさまである。」と解説している。さらに続く第四章(終章)は、

于嗟 闊なり 我を活かさず 于嗟 洵なり 我を信ばしめず

〔ああ 遠く離れて 今はや生きるすべもない ああ 遠く別れて 偕老の志を果たすこともできなくなった〕

となつている。戦場で死に直面した兵士の率直な感情がそのまま溢れた詩となつている。こうした詩を「記録」し「残す」という作業自体、間接的・婉曲的に反戦思想を表していることは疑いなくであろう。しかし、これもやはり抗いがたい運命に翻弄された個人の(あるいは家族の)嘆きを示すものであり、『塩鉄論』の賢良・文学らの主張に見えるような真正面からの反戦思想や「絶対平和主義」を表したものとは言えない。

それでも、『詩経』に軍役・出征を厭う詩が続出する点にはやはり注目せざるを得ない。邶風「雄雉」の首章は次のように詠う。

雄雉 于に 飛び 其の羽を 泄泄す 我の懐い 自ら伊の阻を 諭せり

〔雄の雉が飛び立って ばたばたとその羽をうち鳴らす わが懐いわずらう思い 自ら悩みを残す〕

高田は「妻がその夫の行役に従って外にある者を思うの情

を述べる。雄雉が飛び立って、ばたばたとその羽根を鳴らすことを以て、夫の従征のことに喩える。(中略) その夫の遠征の身の上を思うて、妻は憂思するのであるが、それはわれとわが身にこの悩みを遺るものである。阻は難み、憂えであり、また阻隔の意を併せ含んで、遠く離れた夫の身の上を思う情ともなる。」と解説している。以下、第二章にも、

展なり 君子 実に我が心を勞す

〔まことや そなたのために ほんにわたしの心を苦しめる〕

第三章にも、

道の云に 遠き 曷か云に 能く来たらん

〔遠く隔たった道のかなたにおるわが夫は いつになつたら 帰り来ますであらうか〕

と夫の無事の帰還を切望する句が並び、第四章(終章)は、百爾の君子 德行を知らざらんや 伎わず求めずんば 何を用てか 臧からざらん

〔もろもろの 方方は みな徳行のよいことを辨えておられよう 人を傷わず貪り求める心がなければ なんでよくないことがあるうか〕

となつている。この第四章について、高田は「表面は諸君子に徳行を勧める言葉であるが、内実はわが夫を勉めしめる意味であつて、夫が無事に大役を済ませて、患にかかることなく、早く帰って来ることを切望した妻の深切な念いを述べ

たのである。」と解説している。²⁷つまり、夫も他の将兵も戦場で徳になかった立派な働きをしているであろうから、きつと何事もなく無事に帰ってきてくれるだろう、という願いを込めた詩なのである。

次に、衛風について。衛風も邶風と同じく衰勢に向かう春秋時代の衛の詩を集めたものとされる。まず、「伯兮」の首章について。

伯や竭なり 邦の傑なり 伯や爰を執り 王の為めに前
 驅す

〔わが夫は武勇のすぐれた方 一国中での英材 夫は出征して爰を執り 君の車の前駆となって居られる〕

高田は「出陣している夫を懐く妻の心情である。」と解説している。²⁸続く第二章は次のとおり。

伯の東して自り 首飛蓬の如し 豈に膏沐無からんや
 誰をか適として容を為さん

〔夫が東に出陣してから わたしの頭は蓬の乱れ髪 髪を洗って油もつけられようが 誰に見せようと化粧をしよう〕

高田は「夫が出陣してからは、妻は髪の毛の手入れも怠り勝ちで、頭の毛も梳けず、根を離れて飛び散る蓬の草のように乱れてしまった。」と解説している。²⁹君主の前駆という誇らしい職責を夫が果たしていることなど、夫の身の上を案ずる妻にとっては何の意味もなく、髪の手入れも化粧も忘

れたただ夫の無事を祈るばかりなのである。続いて第三章。

其れ雨ふらん其れ雨ふらん 杲杲として出づる日あり
 願うて言に伯を思い 心に甘んじて首疾す

〔雨が降るだろうと思つたのに 案に相違の明るい日ざし 夫の帰りを待ちわびて 頭痛のするほど恋しさでいっぱい〕

高田は「雨よ降れ触れと予期していたのに、それに反して明るい太陽が出て空は晴れてしまったということをして、夫の早く帰って来ることを冀うて待ちわびているのに、夫はなかなか帰って来ないことに喩えたのである。」と解説している。³⁰続いて第四章(終章)。

焉ぞ諼草を得て 言に之を背に樹えん 願うて言に伯
 を思い 我が心をして瘳ましむ

〔忘れ草でも探して 奥の庭に植えて憂いを忘れない いつも夫を恋しく思つて 心が痛むばかり〕

高田の解説は「妻の心は、いつも夫をほげしく恋慕しているのに、そのために心が痛むのである。胸が痛むほど、夫の帰りを待ちわびている。」³¹とされている。もちろんそのような解釈するのが素直な読み方だろうが、しつこいまでに繰り返される妻の夫への愛情の弁は、その背後に恋しい夫をこのように長く出征させる国家権力への怨嗟、さらにはそれを国家に強いる戦争そのものへの怨嗟が見え隠れするのである。

次に王風の詩について。王風は東遷(前七七〇年)以後の

周王朝の王城（洛陽）畿内の詩を集めたものとされるが、こ
こでも軍役に苦しむ人々の声が見られる。まずは「君子于役」
から。

君子役にえきにゆく 其の期を知らず 曷いつか其れ至らんや 鶏
はねぐらに棲む 日の夕ゆう 羊牛下り来る 君子役にゆく 之
をいかんぞ思なう勿なからんや

〔脊せの君はいくきに驅り出されて 帰られる時期も分から
ぬ いつ帰って来られるであろうか 鶏は安らかに棲に
棲む 日も暮れて 羊や牛は山や岡を降りて帰って来る
脊の君はお役目の仕事で出られてしまった これをど
うして心配せずに居られよう〕

解説の必要もない率直な首章である。続く第二章（終章）も、
君子役にゆく 日あらず月あらず 曷いつか其れあはらん 鶏は架けに棲む 日の夕 羊牛下りいたる 君子役に
于く 苟いやくも飢渴すること無かれ

〔脊の君はいくきに驅り出されて 帰る日も月も分からぬ
また逢う日はいつであろう 鶏は安らかに架とやに棲む
日も暮れて 羊や牛は山や岡を降りて帰って来る 脊の
君はお役目の仕事に出られてしまったが どうかひもじ
い思いいをなされませぬように〕

と戦地にいる夫を案ずる妻の気持ちをこれ以上ないほど率直
にうたった詩である。

次に「揚之水」について。これは戦地にある男が故郷を懐

かしんで詠んだ詩である。首章は、

揚あがれるの水 束薪そくしんを流さず 彼かの其その之この子 我われと申しんを
をまもらず 懐おもう哉かな 懐おもう哉かな 曷いつの月か 予われ 還たき帰きせんや

〔はげしく揚る水の流ながれが浅あくて 束ねた薪たきぎをも流せぬ
あの他所よその人たちは 私と一緒に申の国を守りに来てく
れぬ なつかしい故郷よ いつになったら帰れることだ
ろう〕

となっている。申とは当時あった国の名で、東遷時の周王・
平王の外戚の国。高田は「今は王朝の勢威が衰えて、諸侯の
兵を徴集することができず、われらと共に申の国を守ること
をせず、他国の人たちは、援たすけに来る者もない。われらも早
くここを引き挙げて、郷里に帰りたいと思う。思うかな思しう
かな。いつになったら遠戍をやめて帰れることであろうか。」
と解説している。以下、第二章では「我と甫を成なりらず」、第
三章（終章）では「我と許を成なりらず」とし、同様に軍役を終
えて故郷に帰れる日を待ち焦こがれる前線の兵士の憂心をう
たっている。申・甫・許はいずれも当時中原にあった小国で、
南方の強国・楚の侵略を受けたので、周の平王が諸侯の兵を
徴集し守らせた史実を反映している詩とされる。³³

次に、魏風の「陟しやく岵こ」について。首章は以下のとおり。

彼かの岵こに陟りて 父を瞻望せんぼうす 父は曰いわん 嗟あ 予が子
役やくに行いきて夙夜しゆくや已やむこと無なけん 上こいねがわくは旃これを慎しんしめ
や 猶なお来きたれ 止とどまること無なかれと

〔あの岩山の高い処にのぼって はるかに父のかたをながめる 父は言っておられるであろう あわれ我が子よ 軍役に行くからには 明け暮れ奉公せよ どうか大事にして 無事に帰っておくれ よくいつまでも止まって帰らぬことのないようにと〕

以下、第二章では「岨(岩山)に陟りて」母を、第三章では「岡に陟りて」兄を「瞻望」しており、戦地で父母兄弟が自分を案じているであろうことに思いをはせる兵士の心情を表している。

続いて、唐風の「鴛羽」について。ここでも戦地の息子が故郷の父母を案ずる心情が見える。

肃肃たる鴛羽 苞栩に集る王事 鹽きこと靡し 稷黍を藪うる能わず 父母何をか怙まん 悠悠たる蒼天 曷か其れ所有らん

〔はげしく飛ぶ野雁は むらがり茂る栩に止まる 王のいくさはきびしくて 植えつけの仕事もできかねる 父母は誰を頼りに生きようぞ ああ はるかなる蒼空よ いつになったら落ちつく日もあろうか〕

高田は「野雁は、水辺に棲むものであるが、今は、その所を得ないで、栩の林に止まって居り、且つ後趾もないので、これを以て、われの所を得ないことを比したのである。王のための仕事は、きびしくて、疎略にはできぬから、戦さに出て働いているのである。それで、田畑を耕して五穀を植えつ

けることもできぬ。父母は誰を頼みにして生活の道を講じようや。ああ、はるかなる蒼空よ。いつになったら軍役を免れて、わが所を得て、郷里に帰って父母を養うことができようぞ。」と解説している。³⁴ 以下、第二章では「父母何をか食わん……曷か其れ極有らん」(父母は何を食べて生きようぞ……いつになったらいくさが止もう)、第三章では「父母何をか嘗めん……曷か其れ常有らん」(父母は何を食べて生きようぞ……いつになったら平安の世になろう)と詠んでいる。儒家が特に重んずる親への「孝」が十分果たせるような平和はいつになったらやってくるのか、と訴えている詩であり、反戦的主張がやや色濃く表出していると言える。

同じく唐風にある「葛生」は、戦死した夫を思慕する未亡人の詩とされている。

葛生じて楚に蒙い 藪野に蔓る 予が美 此に亡し 誰と与にか独り処らん

〔葛のつるは生え延びて棘の木にからまり 藪のつるは野にはびこる わが良き人はここには見えぬ 誰と共に独りいよう〕

以上が首章であるが、第二章では「誰と与にか独り息まん」(誰と共に安らぎ居よう)、第三章では「誰と与にか独り且さん」(誰と共に独り世を明かそう)と詠い、第四章で「百歳の後 其の居に帰せん」(百歳の後にこそ 共に君の塚に入ろう)、第五章(終章)で「百歳の後 其の室に帰せん」(百

歳の後にこそ 共に君の墓穴に入ろう」と詠っている。「予が美」が「戦死した夫」である明証はないが、過去の注釈はすべてそのように解釈している。³⁵

次に、秦風の詩から。言うまでもなく、後に軍事大国に成長し、その圧倒的な武力で史上初めて中国を統一し、皇帝号を称し始める秦である。その秦における詩にも、出征した夫の身を案ずる妻の詩「小戎」が見られる。

小戎 僕収 梁輶を五檠す 游環 魯駟 陰朝 塗続
文茵 暢轂 我が駟驛に駕す 言に君子を念う 温と

して其れ玉の如し 其の板屋に在りて 我が心曲を乱る
〔兵車の軫は浅く 輶は五つ巻き 馬の背の環に馬の魯紐
陰 朝 白金に結ぶ 虎の茵に長い轂 青黒馬に足白
馬 なつかしのわが夫 玉のようなあの方が板屋に棲ま
れるのが心を乱す〕

出征の兵車の立派さを詠った上三句に対し、下二句は一転して出征先の夫の苦勞を案ずる内容になっている。以下、第二章・第三章（終章）も上三句が戦車や馬の威容をたたえ、下二句が夫の身を案じ生還を願う内容になっている。以下に第二章・第三章の下二句のみ挙げる。

言に君子を念う 温として其れ邑に在り 方に何をか期
と為さん 胡ぞ然く我 之を念うや
〔いとし夫を思えば 田舎の邑に居られる いつになつた
ら帰られよう 思いは絶えぬわが胸の内〕

言に君子を念う 載ち寝ね載ち興く 厭厭たる良人 秩
秩たる德音

〔いとしい夫が 寝ても興きてもしのばれる やさしい夫
よ 良き人柄がしのばれる〕

もう一首、「晨風」も見ておこう。第一章は、

駢たる彼の晨風 鬱たる彼の北林 未だ君子を見ざれば
憂心欽欽たり 如何ん如何ん 我を忘るる実に多き

〔はげしく朝風が吹いて 茂る林に秋が深い 久しく夫に
逢えなくて 心配が深まるばかり どうして どうして
わたしを忘れてしまったのか〕

以下、第二章・第三章（終章）も同様に久しく出征して便りもない夫の身を案ずる内容が続く。

以上、『詩経』国風諸篇に見える出征兵士とその家族が詠んだ厭戦的な詩を挙げてきた。引き続き、小雅・大雅・頌に見える同様の詩も確認していく。³⁶

まず注目したいのは小雅「采薇」である。全六章からなる長い詩であるが、首章・第二章・第三章は厭戦的、第四章・第五章は尚武的、終章は再び厭戦的言辞が並ぶ。

薇を采り薇を采る 薇も亦作う 帰らんと曰い帰らんと
曰う 歳も亦莫れぬ 室靡く家靡きは 玁狁の故なり
啓居するに違あらざるは 玁狁の故なり
〔ぜんまいをあちらこちらと取りすすむ 春になってぜん
まいが生えているのである 帰りたい帰りたいと言いな

から いつか歳も暮れようとしている 夫が出征し妻が
家を守らねばならないのは 獬豸が乱をなしているから
だ 士卒が安らかにする暇もないのは 獬豸が乱をなし
ているからだ」

以上の第一首では、これまで触れてきた詩と同様に出征に
よる夫婦の別居を嘆くとともに、それを強いる原因として獬
豸(北方異民族の一種)³⁷の侵攻を挙げている。続く第二章は、

薇を採り薇を採る 薇も亦柔なり 帰らんと曰い帰らん
と曰う 心も亦憂う 憂心烈烈たり 載ち飢え載ち渴く
我が戍未だ定らず 帰聘せしむる靡し

〔ぜんまいをあちらこちらへ行って採る ぜんまいもまた
柔らかく生えている 早く戍役を終えて帰りたいという
思いがつのり 心の憂いは増すばかり つらい心は燃え
盛るように激しく 飢え渴いているようだ しかし獬豸
の侵攻は止まず私の任期も定まらず 帰って家族の安否
を問うこともできない〕

さらに第三章は、

薇を採り薇を採る 薇も亦剛し 帰らんと曰い帰らんと
曰う 歳も亦陽なり 王事監きこと無し 啓処するに遑
あらず 憂心孔だ疚む 我が行来らず

〔ぜんまいをあちこちに行って採る ぜんまいももう固く
なってしまった 帰りたい帰りたいといううちに 早く
も陰暦十月になってしまった 王の公用は疎略にできず

我らは安らぎ居る暇もない 心は故郷を思い憂い病む
ばかり 無事に帰れないかもしれない〕

と望郷の念と国防の任の板挟みになり、さいなまれる心境を
吐露している。しかし、次の第四章は、

彼の爾たるは維れ何ぞ 維れ常の華 彼の路は斯れ何ぞ
君子の車戎車既に駕し 四牡業業たり 豈敢て定居
せんや 一月に三捷せん

〔あの光輝くものはなにか これぞ常棣の花である あの
大きな戦車は誰のものか 将帥の乗る車である 我らの
乗る戦車にも馬を繋ぎ 四頭の牡馬が躍り上がる 呑気
に落ち着いてなどいられるか 月に三度勝って戎を滅ぼ
さねばならぬ〕

と二転して勇ましい口調に変わり、第五章も、
彼の四牡に駕す 四牡駢駢たり 君子の依る所 小人の
腓う所 四牡翼翼たり 象弭魚服 豈日に戒めざらんや
獬豸孔だ棘なり

〔あの将帥の戦車に四頭の牡馬 四頭とも勇ましい限り
まさに将帥の乗る戦車であり 歩兵が随う戦車である
四頭の牡馬は整然と揃い 将帥は象牙飾りの弓と魚皮張
りの箠を着けている 我ら兵卒も日々心して敵に当たら
ねば 獬豸の侵攻は素早いぞ〕

と戦意をかきたてるような口調になっている。ところが第六
章(終章)では、

昔我往きしとき 楊柳依依たりき 今我來る 雪雨ること霏霏たり 道を行くこと遲遲たり 載ち渴し載ち飢す 我が心傷悲す 我が哀を知る莫し

〔昔我らが出征した時は 楊柳が枝をなびかす春だったが 今我らが征役を終え帰る時は 雪が乱れ降る冬である 心は故郷へとはやるが行軍は遅々として進まず 渴きに苦しみ飢えに苦しむ 我ら士卒の心は故郷を思い悲しみに暮れるが この悲しみを誰が察してくれようか〕と再び遠征の苦しみを訴えている。

〔采薇〕に続く「出車」も同様に獵狃や西戎という異民族を撃った戦いを詠った詩であるが、將軍南仲の戦勝を称える勇ましい口調が目立っている。しかし、そんな詩にあっても、豈婦を懷わざらんや 此の簡書を畏る

〔故郷に早く帰りたいと思わないことがあるのか しかし天子の出陣命令書を畏れ奉じて奉公するのである〕(第四章第四句)

と望郷の念にかられる兵士の心情が挟まれているのである。続く「杕杜」も出征に関する詩であるが、夫の無事帰還をほのめかす展開になっている。第一章は、

杕たるの杜有り 睨たる其の実有り 王事監きこと靡し 我が日を継嗣す 日月陽なり 女心傷む 征夫違あらん

〔秋になって杕に実がなり 紅く熟して鈴なりになってい

る 出征はおろそかにはできぬので 日々懸命に務めを果たしてきた もう歳の暮れの十月だが軍役は終わらず 妻の心は夫を待ちわび傷み悲しむ 夫もそろそろ暇をもらい戻ってこないだろうか〕

とあり、ここまで見てきた詩と大差ない内容だが、第二章以下第四章(終章)までの末の三句が、

卉木萋たり 女心悲しむ 征夫帰らん

〔春になってしまひ) 草木も繁り 妻の心は悲しむ 夫よ帰ってきておくれと〕 (以上第二章末三句)

檀車幘幘たり 四牡瘡瘡たり 征夫遠からじ

〔荷車は破れ壊れ 車を引く四頭の馬も疲れ切っているが 夫の帰郷ももはや遠くはない〕 (以上第三章末三句)

卜筮偕にす 会言近し 征夫邇からん

〔占ってみると亀卜も占筮も 「生還は近い」と声そろろう 夫の帰りはもうすぐだ〕 (以上第四章末三句)

と連なり、家人の出征を詠った詩では珍しくハッピーエンドで終わっている。この「杕杜」について高田真治は、

此の杕杜篇は、主として出役の士卒の労苦を偲び、家郷の人達が、その帰還を待ち望む情を述べている。出役の将士が、その家郷を念うのは、采薇以下の諸篇に見ゆる如く、当然の人情である。しかもこの私情にのみおぼれず、王事を勉めて止まないのは、公私の別である。此の詩に家郷の妻が夫の早く帰還することを待ちわびる綿々たる情は、人

情として自然のことであるが、しかも王事を励んで、これをおろそかにしてはならぬことを思うのは、公私の別をわきまえているからである。征夫の労苦を思うて、傷悲するけれども、怨嗟の調の見られないのは、変風に見ゆるものと異なるものであり、正雅たる所以であろう。且つ采薇・杕杜の二篇は、共に征夫の帰還を労う詩であるが、采薇篇は征夫の労苦を主として述べ、杕杜篇は、家郷の人の征夫を念うの情を主として述べてあり、両者相待って、将士を労うの詩の正を見るべきである。

と解説している³⁸。いかにも正統的な儒教解釈、『詩経』解釈と言え。家族の情愛にも理解を示しながら、しかし国家の大事(戦争)に献身する庶民を積極的に顕彰することで、支配される側への思いやりを忘れない為政者と、家族を思いつつ為政者への忠を全うする庶民とで成り立つ国家を建設し維持する、それこそが儒家が目指した理想であった。

しかし、何度も言うが、『塩鉄論』の賢良・文学の弁に見える「絶対平和主義」はそれとは趣が違ふ。違ひの焦点は、「国家(為政者)が行う戦争は果たして常に義戦なのか」という疑いの有無であろう。『詩経』に数多く見える出征を厭う詩は、いずれも戦争そのものに疑いを挟むものではない。しよせんは『詩経』も漢代以後の歴代王朝で「経典」とされた体制側の書籍であり、いかに庶民の厭戦感情に理解を示そうとも、為政者が行う戦争そのものの正当性に疑いを挟むような詩句

は仮にあったとしても周到に排除されたのであろう。このように見てくると、漢の存亡を賭けた戦いであった対匈奴戦争の正当性に真っ向から異議を唱えた『塩鉄論』の特異性に、あらためて注目せざるを得なくなるのである。

以上『詩経』に見える、戦場の兵士と故郷の家族が思いあう内容で反戦的・厭戦的詩情を表した詩は計一六首にのぼった。しかし『詩経』にはそれらとは毛色の違う内容で反戦的・厭戦的な感情が表れている詩もある。それらの詩も確認しておきたい。

まずは、小雅の「祈父」である。その第一章は、

祈父 予は王の爪牙 胡ぞ予を恤に転じ 止居する所靡
からしむる

(隊長どのよ 我は王の近衛兵 なぜ我を憂いの多い征役に転出させ 安らかに止まり居られないようになさるか)

となつてゐる。王の近衛兵という戦場とは無縁な持場から前線の戦場に送られることに不満を漏らしているのである。第二章でも同様の不満を述べた挙句、第三章(終章)の末句で、

母の饗を戸ぬる有らしむる

〔老いた母に煮炊きの苦勞を強いらしめるのか〕
と(自分かもし戦死したら)老母の世話をする者がいなくなり孝を尽くせなくなる、といかにも取つてつけたように不満の理由を述べているところがおもしろい。もちろん不満の本

音は孝が尽くせないからではなく、命が惜しいからであろうが、こうした人間臭さも垣間見せてくれるところが『詩経』の魅力である。

一方、王事に頻繁に駆り出される自身の壮健を誇りながらも、戦場に行かずに安閑としている人臣が多いことに不満を述べた詩もある。「溥天の下 王土に非ざる莫く 率土の濱 王臣に非ざる莫し」(第二章)の句で有名な小雅「北山」である。その第三章は、

四牡彭彭たり 王事徬徬たり 我が未だ老いざるを嘉し
我が方に将なるを鮮す 旅力方に剛として 四方を
經營せしむ

〔四頭の牡馬は車を牽いて駆け回り 王事はひっきりなし
私がまだ老いていないことを称え 私がまだ壮健であ
ることを良しとされ 体力剛健として 四方に使役され
る〕

とまだ老いてはいない自身の体力・戦闘力を王室が評価して四方に出征させることを誇りながらも、第四章から第六章(終章)では一転して、

或は燕燕として居息し……

〔あるいはぶらぶらして家に安居している者もあり……〕

或は息偃として牀に在り……

〔あるいは休息して仰向けに寝台に寝ている者もあり……〕

……

(第四章第一句・第三句)

或いは叫号を知らず……

〔憂苦のあまり叫び呼ばわる者がいることも知らず……〕

(第五章第一句)

或いは湛楽して酒を飲み……

〔ただ楽しみにふけり酒ばかり飲む者もあり……〕

或いは出入風議し……

〔いたづらに朝廷に出入りして議論をもてあそぶだけの者もあり……〕

(第六章第一句・第三句)

と、戦場に行くこともなく安穩と日を送る人臣たちを批判し、自身の身の上との不公平を訴えている。これを反戦的・厭戦的な詩と見ることに異論もありそうだが、「自分だけが貧乏くじを引かされている」ことの原因が戦争にある(そうでなければ、身体壮健を理由に自分だけが駆り出されることもないはず)という点を考えれば、戦争がなければこうした不公平も起こり得ないことになり、結局のところ戦争の存在そのものへの不満を婉曲に表現した詩と理解することも可能になるろう。

最後に、ただ単純に、しかし切実に戦場での苦しみを詠った詩を挙げたい。小雅の末尾の一首、「何草不黄」である。

何の草か黄ならざらん 何の日か行かざらん 何の人が
将かざらん 四方を經營す

〔どの草も黄色く枯れ衰え 軍兵は行軍しない日はない
進軍しない人はいない そうして四方の兵乱を鎮圧して

いる」

何の草か玄からざらん 何の人か矜ならざらん 哀し

我が征夫 独り民に匪すと為す

〔どの草も枯れて黒ずみ どの兵も妻と離れやもめのさま

哀しや 我ら兵卒 一人前の民とは見なされない〕

兎に匪ず虎に匪ず 彼の曠野に率う 哀し 我が征夫

朝夕暇あらず

〔野牛でも虎でもないのに 冬枯れの野原を引き回される

哀しや 我ら兵卒 一日中休みなく使役される〕

芄たる狐有り 彼の幽草に率う 棧の車有り 彼の周道

を行く

〔毛が長く尾の大きな狐が 深く繁った草むらに身を隠す

我らは粗末な棧車(役車)に従い 大道を駆使される〕

小雅末尾の数首は、西周の滅亡を招いた幽王の時代のものとされる。この「何草不黄」は、長期間兵役に駆り出され、

家畜以下の扱いで戦場を駆け回らされ、夢も希望もなく土気色の顔で原野を彷徨する兵士の様子を彷彿とさせる。戦場の一兵卒の惨めさは、時代と場所を超越した姿のようである。

以上の三首も含めれば、反戦的・厭戦的内容の詩の数は合計一九首となる。現在『詩経』に見える詩の総数が三〇五首であるから、その割合は六・二パーセントとなる。時代も場所も状況も異なるため単純な比較は意味がないかもしれないが、日本の『万葉集』の総歌数約四五〇〇首のうち、「防人

の歌」の数は九八首、割合は二・一パーセントである。『詩経』に見える反戦的・厭戦的内容の詩の数は、決して少ないとは言えないであろう。

現行の『詩経』では、以上の小雅の後に「周王朝の天子の正楽の詩」である大雅と、「先祖の功德をほめて、宗廟の祭祀に奏する楽歌」である頌が続く。しかしそこに見える詩には厭戦的・反戦的なものはなく、わずかに頌の「時邁」に周の武王が殷を滅ぼした後に、

載ち干戈を戡め 載ち弓矢を囊にす

すなわち、武器を集めてしまひ込み、再び用いない意思を表した、と詠う点、また同じく頌の「武」にも武王が、

殷に勝ちて劉を遏む

と殷を滅ぼした後は「劉」(殺の意)を止めた、と詠う点に、軍事を慎重に扱う姿勢が見られる程度である。

なお、大雅「麟」の第二章・第三章に、

古公亶父 来って朝に馬を走らし 西水の澍に率いて

岐の下に至り 爰に姜女と聿に来りて宇を脩る 周原黼

黻として 董茶飴の如し(以下略)

(古公亶父は 早朝から馬を駆り 西水(沮水・漆水)のほとりに沿って 岐山の麓に至り 妻の姜女とともに自分たちの居るべき土地を見た 周原(岐山の地)は肥えて草木も茂り 董も茶も飴のように甘い)

と詠まれた、周文王の祖父の古公亶父が故郷の幽(現陝西省

彬県)を去って岐山南麓(いわゆる周原。現在の陝西省汧水・漆水の間)に移住した場面は、『孟子』梁惠王下篇や『史記』卷四周年紀に見えるように、実は狄の侵攻に圧迫され、戦わずして豳の地を譲った末の移転が史実であった。

この史実は、本研究にとって重要な意味を持つものである。周人にとって極めて屈辱的な事態であったはずのこの移転が、結果的には移転先の周原が農耕にも牧畜にも適した恵まれた地であり、そこで周が大いに繁栄できたため、かえって古公壇父の人徳の高さを示す逸話(屈辱に耐えて無益な戦争を回避したことで、かえって天から豊穡の地を与えられた、という文脈)へと昇華されてしまったのである。

この逸話は、儒学(儒教)における反戦思想の展開において重要なカギになるものと筆者はにらんでいる。しかし、本稿で扱った史料からは十分な情報を得られない逸話なので、別稿での検討課題であることを示すのみでとどめたい。

おわりに

以上、本稿では『儀礼』『大戴礼記』『周礼』『詩経』に見える反戦的・厭戦的言辞を確認した。総じていえば、「礼」に関する書物である前三者にはそうした言辞は確認できなかった。これらは、儒学(儒教)が漢王朝の御用思想として確立されていく過程で編纂・經典化されたものであり、漢王

朝の永続のために整備された礼制についての典籍である以上、高祖劉邦が馬上で天下を取って始まった漢王朝の存在意義を揺るがしかねない厭戦的・反戦的文言が見られないのは、全く当然のことであった。

それに対し、周代以来の詩を集めた『詩経』では、計一九首に及ぶ詩から厭戦的・反戦的言辞を抽出できた。特に夫の従軍に対する夫婦の嘆きを詠った詩の多さには注目される。そうした詩をあえて多数収録し後世に残そうとした行為そのものが、為政者に兵役に就かされる民衆の労苦を意識させ、軍事に慎重な政治を志向させようとする意識の表れと言える。その点で、『詩経』は儒家的反戦思想の確立と浸透に大きく貢献した典籍と見なし得る。

しかし、今回の四書からも、結局のところ『塩鉄論』の賢良・文学らが主張した「絶対平和主義」に匹敵するような概念や言辞は一つも見いだせなかった。いったい、賢良・文学たちはどのような儒家文献に依拠して自分たちの思想を練り上げたのか。その課題の解決は、次稿以降の分析と検討に持ち越さざるを得ない。

注

- 1 拙稿「中国古代儒家文献に見る反戦思想(1)——『易経』『書経』『礼記』『論語』——」(『常葉大学教育学部紀要』三六、二〇一六年)。

- 2 拙稿「『塩鉄論』に見る反戦思想」(『常葉大学教育学部紀要』三五、二〇一五年)。
- 3 塩鉄会議が実施された昭帝期の次の宣帝期(前七三年—前四九年)に編纂されたことがわかっている。
- 4 福井重雅「読『塩鉄論』芻議—続—」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四三輯、一九九八年)。
- 5 池田末利注釈『儀礼』1(東海大学古典叢書、一九七三年)の「解題」、京大東洋史辞典編纂会編『新編東洋史辞典』(東京創元社、一九八〇年)の「儀礼」の項、山根幸夫編『中国史研究入門』上(山川出版社、一九八三年)の「儀礼」の項(二〇八頁)、神田信夫・山根幸夫編『中国史籍解題辞典』(燎原書店、一九八九年)の「儀礼」の項を参照。
- 6 『漢書』芸文志によれば『儀礼』は「礼経」とも称されており、前漢時代には「経典」的扱いをされていたと推測される。
- 7 『漢書』卷四三叔孫通伝。
- 8 前掲注5『中国史籍解題辞典』の「大戴礼記」の項、栗原圭介訳『大戴礼記』(明治書院『新釈漢文大系』一一三、一九九一年)の「解題」参照。
- 9 以下、『大戴礼記』の訓読文は栗原圭介訳注『大戴礼記』(新釈漢文大系、明治書院、一九九一年)に依る。また、現代語訳は同書を参考に筆者が施した。
- 10 『漢書』卷三六楚元王伝(劉歆伝)、同卷九九下王莽伝下。津田左右吉「左伝の思想史的研究」(津田左右吉全集一五、岩波書店、一九八七年)など。しかし、近年では戦国時代後期(前三世紀)にはその祖本が存在したとする説が有力である。
- 12 以下の『周礼』の文は本田二郎『周礼通釈』上・下(秀英出版、一九七七年・一九七九年)による。
- 13 本田前掲注12『周礼通釈』下、四三頁。
- 14 同書上、二八六頁。
- 15 同書上、六六八頁。
- 16 同書下、五〇頁。
- 17 同書下、二二六頁。
- 18 同書下、五五三—五五四頁。
- 19 西伯(文王)。殷を滅ぼした武王の父で、古来理想的な君主の一人とされる)の後妃とする説もある。高田真治訳注『詩経』上(漢詩大系1、集英社、一九六六年)三九頁—四〇頁解説参照。
- 20 同書上、五五頁。
- 21 同書上、五七頁。なお、「魴魚」はヲシキウオ、アナカツオを指すとされ、「頼尾」については毛伝(漢の毛萇による古注)・集伝(南宋の朱熹による新注)ともに「頼は赤なり。魚勞すれば則ち尾赤し」とし、集伝はさらに「魴の尾は本と白し、而るに今赤ければ、則ち勞するこ

- と甚し」としている。
- 22 同書上、六八頁―六九頁。
- 23 春秋隱公四年(前七一九年)に衛で州吁が桓公を殺して公位を篡奪し、宋・陳・蔡とともに鄭を攻撃したさいの詩とされる(同書上、一三二頁―一三三頁参照)。しかし州吁は人心を得られず、同年中に殺害された。
- 24 同書上、一三三頁―一三四頁。
- 25 同書上、一三四頁。
- 26 同書上、一四一頁―一四二頁。
- 27 同書上、一四二頁。
- 28 同書上、二五四頁。
- 29 同書上、二五五頁。
- 30 同書上、同頁。
- 31 同書上、二五六頁。
- 32 同書上、二七九頁。
- 33 同書上、二八〇頁。
- 34 同書上、四三六頁。
- 35 同書上、四四四頁―四四五頁。
- 36 以下、小雅・大雅・頌から抽出する詩の訓読も高田真治訳注『詩経』下(漢詩大系I、集英社、一九六八年)に依拠するが、現代語訳は同書下巻では解説と混交しており抽出しにくいので、同書を参考に筆者が施した訳文を示すことにする。
- 37 後漢末の鄭玄は「玃」と「北狄」を同じとし、「北狄は今の匈奴なり」と注している(『毛詩正義』鄭玄箋)。
- 38 高田同書下、五六頁。
- 39 高田同書下、三二〇頁。
- 40 高田同書下、五五六頁。
- 41 『史記』では「薰育」と表記している。上述の『詩経』小雅「采芣」に見える「玃」と同種と思われる。
- 42 周原の自然環境と周・秦による開発の歴史については、村松弘一『中国古代環境史の研究』(汲古書院、二〇一六年)第二章「秦の関中平原西部への拡大と地域開発」に詳しい。

